



~ 13  
3249  
3

13  
3249  
3



昭和十一年一月二十四日

神

伯父さうなれ後者小助が修り者の姿お打扮て立出たり。小太郎と目入るる  
 咲然と驚れ何とも言ひいへば只呆れて居るるれ其時小女へ姫  
 對ひ奉伏し某の由家譜代の由家隸後者小女と一りの由を伝ふと云  
 小を討と願いし由甥のとの終る音はれるは伯父が光景さも驚れり  
 我もまご汝が姫君を傳き此由居ることさらし不守取れとて後  
 る。まづ某が身の上を語り受え汝と家子小栗殿とありて后見小栗  
 高瀬の由姫君を尋まわらせ。小栗殿と誓煙をばす内せんといふ國  
 とる。まづ漁師となり。武州の浦の里に居る。只願姫君の由去向を  
 秋不意姫君我家に宿り多ひ。我妻を浪まふ小栗  
 大敵の由とも知れずありしがいつかは仔細に告ぐ人姫君と名告  
 継子小栗判官との由連添人と腹悪とあるの邪うし。後にも姫君と

先んとして瀬戸橋の上で殆害せんとする危きを見えしは小四郎が舟  
乗りまゝに跡めて妻と我を殺しつゝ。さて又兄の小四郎の姫君なるし  
知りまゝにせむ化國戸小雀に跡めて姫君なることを知りて先非を  
悔ひ身價を我母支は在家を捜索はかりし。此金りては身と傍ひ小栗  
いの母奉まよとくねくねと生害せりとて小吉郎又尋ねたさる我父死  
のあつ鳴呼志はしつゝとつゝの流傳してぞ嘆えたり。汝が嘆えたること  
あつら。此後の物語を熟く見て亡父の志氣を續けたる。これの上とて孝まは  
公を静めて社父孫と誂く又も誂りたる。さても夫よりその令成るも受  
納めては行末を捜索して今日此所へ巡りまゝて不料も姫君の山陰に於  
一夜の宿を乞はるる兄小四郎が神靈の御とあらうとおぼゆ宿借りしとて  
姫君も我れ知つてありたる。此の回向してと赤窟に流しつゝまゝに

奈何なる法諱と神主とんが故殿名武を光君は又婦かゝりしつゝ。  
さては姫君もははまとうと始名告りさんと想ひし。まも家主居らぬと  
父へまゝら小栗殿さ入居らぬや。還らぬらんを附お名告んとす。おと  
念ひは。さあらぬ神を流經とる。うちも故殿の御事と思ひつゝ。  
我母もわらへ頻々涙のちりり落し物お終らぬ。しむ。布施ごと初  
に鏡の北方の持る唐鏡は差り移る。いよく姫君ありけり。と。初  
物よりし。空ひさる。何となく故殿の面影あり。はせ。懐旧の涙も  
ふさがり公苦しく。ゆふ草卧ぬと傍りて臥す。入る。思音。法は  
打つ。不圖も。下平と。からん。云の。まの。て。神。姫君。行  
せ。勉。恰好。小を。奉。還。り。ま。て。姫。を。支。へ。止。め。ん。と。ま。れ。ど。も。カ。サ。お。び。た。さ。り。  
身價。今。ま。は。し。ま。ま。の。難。儀。お。及。ぶ。紙。門。ご。お。見。ま。す。り。つ。つ。あ。の。時。こ。と。

御清用



小太郎

白の聴



兄の遺金をとて  
女全の身と贖ふ

照天

万平

兄の最期の一念を遂る時とて流しうる。其令をりて投て女姫の心身を憐れ  
 ば。これにて兄が牙の科を免はしめんと平伏を姫の涙をわしうる世よりの  
 奴家と主と想ひ。さをもてあまののうて怨ごとくあつた必竟奴家  
 が思よりの忠臣たるを知りて。御戸格の危難の附名告げぬの意を  
 りて非業の死をうせしり。さう多く其罪を奴家がうらめを  
 か。小四郎の靈此所在。今の言語をよく。涙を拂て孤忠のさうば  
 感謝をいふ。辞は。嗚呼。香と云はして跡の涙も理もたじ。小女。小女  
 友への姫の辞をうらめ。悲し。その中れ喜びも。涙を拂て。さうり。は  
 こ。冥加なる命。只今宣ふ。は。草葉の。さう。小四郎の冥加  
 へ。と。我。が。いと畏くも。あり。と。我。許。回。か。し  
 姫の仁意のを根を感佩して。は。き。照天姫の。涙を及の。秋

母て。お。拭。ひ。は。さ。さ。の。汝等一族甲斐の奴家。心。我。を。さ。さ。の  
 艱苦を。予。は。く。と。小女。今。の。物。語。を。委。し。知。り。ぬ。今。無。不。料。お。へ。え。の  
 宿。事。ら。ま。及。び。ん。父。母。の。霊。よ。り。て。此。え。お。幸。と。下。り。多。う。幽。冥。お  
 め。て。の。斯。る。神。霊。の。在。り。又。う。が。陽。府。お。は。し。ま。其。所。な。と。明。ら。う。か  
 り。さ。う。り。馬。の。道。の。坂。東。へ。も。ゆ。せ。武。士。の。横。山。づ。ね。お。あ。く。と。非。業。の  
 死。を。遂。多。ひ。さ。さ。を。合。お。在。さん。奴。家。を。れ。も。知。ら。ば。は。横。山。ま。の。道。  
 爾。の。縁。政。も。て。斯。る。り。と。横。山。は。誘。引。く。相。摸。路。の。終。院。堂。村。お。隠  
 り。し。と。話。の。首。と。母。の。病。死。助。重。お。還。會。毒。酒。の。名。難。く。ま。ま。は。い。  
 後。万。長。が。許。し。賣。渡。され。再。び。ま。は。還。命。今。又。さ。さ。の。終。り。の  
 命。を。物。語。れ。小。女。即。ち。主。の。小。栗。が。牙。の。上。を。流。り。さ。さ。小。女。の。婚。の。命。  
 命。を。さ。さ。哀。し。涙。よ。れ。は。清。ひ。て。居。り。し。る。父。母。て。后。静。子。は。さ。さ。ら

かゝる幾回嘆賞おしと云つたを尋ねる尋ねの女性よりせういふて爾る氣難お  
 堪ぬき家や姫君の四通五達海の授多ふと承る凡なうがはうの事こそ  
 昔前を守りし頃の人物はよまづの危き頃の多むを暇さるや  
 正足親善菩薩の冥助しかは慈護のあつたれや中て運も多し  
 公衆一おほせよと云はしゆま照天姫家武運もかまひる支助を  
 と欲もお模山一色二人の能討て小栗と名武の家は冤罪の巧と堂  
 后我夫再び世もあつたら功も賞し夫婦を従今の喜昔法  
 おまへん力も助けて志まを果してよ人と云ふ小介も小を即も  
 首をむけてさうの命をさすもゆらと嘆此身の内將もへうはる  
 そてもうを厭ふ強くおほせよと回急果て小を即も小介も  
 さうの事某熱く思惟とるも万平姫の在在とるの事いふ近も

此小栗忍びじりに入奉然さうの事と云く此西と立退れ免はさる  
 青墓の近き辺りも忍び入りしは夫婦は再會の便あらんま東  
 居ふくつる密使をよて告知らし足彼孰く示合し奉意を遂へ  
 いふやと高嶽をうせつ小介首首このまらめて宜謀るり助手君俄  
 万長が許を去るが彼を怨と懐き小栗殿の事を世おはせせら  
 のいかに害あらん我えまふれねぞ幸の方長が方おはせせら  
 小栗どのかえまふ彼亦の光景を密に謀りて殿を誘引する  
 伯父と甥と高嶽をまめ姫おもよくゆへ知し即日三羽退免は  
 杭池川の辺めてかごちり草屋を俵ひ主従三人此地方おまの  
 居りぬ是より前小太郎姫の守刀を質しし少の令を渡へし其令  
 りて此草屋を償ひし不願且説小栗助重の使を遣へし只願



小栗申向去尋路東國の御寄と示し合せ早く不懐と遠く  
さるても小栗申の御寄と行ける。獨らちして居るし小栗と隔く。

風の音にむらうされてこれれとが藤屋の里の衣ららん。

とうち今更ののり。小栗屋の今夏。山郭は打籠かんの奇

とこそかきぞんたしうまれば持衣のすか。踊るやんか。ほたることかちと

涙のそとを顔の隅の柴折戸をひきき。静ふあみまののり。小栗

とまを熟るふ。五丁のゆるる翁之腰を曲めり。近よりて。免されぬ某と

旅の修行者よと。少く同歩し。此近近。藤屋の里

と。雨のい。某前日。彼西を。小家の宿。宿作り。ほろ。不

めりけるは女房のひて。彼女房のやま。奴おま。此辺の長者が。折ふ

あま。縁故ありて。行往と。かちと。まを。奴おま。此よ。居るを。足下ハ

下。を。彼。の。と。歩。み。多。く。彼。宿。り。も。多。く。奴。家。が。此。よ。居。る。は。し。を

ま。と。志。し。し。り。ぬ。れ。し。爾。の。ぬ。れ。ど。此。の。明。白。お。告。げ。ま。や。我。身。よ。と。さ。り。し

か。ら。ん。と。笑。へ。や。と。心。を。ほ。ろ。る。思。へ。と。余。涙。な。く。頼。む。と。下。お

せ。も。便。な。れ。ば。その。何。と。長。考。も。て。ま。塔。の。名。を。ゆ。ら。し。ひ。ま。と。同。母

長。考。の。万。長。と。い。ひ。ぬ。夫。の。世。を。憐。れ。る。ぬ。れ。ば。其。の。名。を。さ。す。と。容。貌。と

如。此。と。あり。と。笑。へ。と。熱。く。心。を。か。め。諸。づ。き。神。仏。を。巡。れ。し。此。よ。宿。り

う。と。足。下。を。さ。り。け。と。か。し。然。る。今。船。不。圖。も。足。下。を。さ。り。け。る。女。房。の。伝。し

容。貌。に。似。た。れ。ば。り。と。思。ひ。と。さ。り。け。る。我。身。の。あ。ま。と

藤。屋。の。里。に。古。奇。な。吟。の。夢。と。庭。面。の。風。色。を。詠。せ。し。に。あ。ま。と。藤。屋。の

お。ほ。え。や。お。と。と。同。た。れ。ば。小。栗。を。さ。り。け。て。さ。り。け。る。我。妻。の。ゆ。き。の。里。の。あ。ま

居。る。や。尚。も。其。の。実。不。言。と。め。と。再。び。口。を。開。く。と。さ。り。け。る。折。り。と。障。子。と。さ。り。と





小栗卷之六

九三

おぼあいと勢中なる体女房とあめちうらち物詰りのをせざるうの猛然に  
嫉妬の嘘胸も迫り走入り死のほいを云んとせしがまて増付さるゆも  
形かろうの歌しく語らぬ昨日今日馴一人と思われど奈何人ぞり相識  
女あふかると柴折戸の隙よりては詛する着一着ふじりて  
親こそ革れまがめしきもねれ小秋めてありうの愕然にして怒るれかづ  
さてこそ足せ知れらる。我夫らその世と思ふ小栗判官代助重とのゆく  
小秋の照天姫も差ひはし今さら思ひあをせれば今春盗人の小秋は  
春赤ひ去りたる斯る人との謀を做らる事とおぼえらる欺えたる  
我夫の志まこと知れられと今胸もさる縁で柴折戸あらくおし用て  
走り入はし助重と照天姫とあふ膝と接して睦はしくお語らるる同  
おいふ入る助重が胸の辺りへむき抱く声うらして涙のみ此やどりの

化よ生もの何事ぞるあまやと思ひけりお豫てよりの小秋が色香も愛  
多し現在の妻の奴あわ露らるるもはへるのを隔るる恨こそよと小秋を  
愛憎思ひまら首より鬮くのふあねれ斯るぞと宣らるるてまを  
るまき妻とばしてりとも給事へさんお奴家お妻とおぼえ後へさる做  
あふとおちのれとち怒れぬが助重の面目なうやは悔れ回意せいで  
居らりけりお見その対照天の對し奈何小秋よ今まをら口賢くも妬めらる  
奉とせとていへしお主の男をさへるる姫女とていふあやや王を欺く  
人では今我まを連行を尚よく止めまゆらうと言語荒らるを放ちりり  
小栗がまをとりて門支行人とあふりちり。はも愛れ照天姫もお見のまを  
我ののまをさるとお怒を祭し面と赤しひまきさめ。知ら後へ鬮のさ  
めれと助重殿と奴家と親のゆるせま婦の然るも縁故ありて去る小秋



未だ父上人も知る常陸國の一城主名武常陸公の光君ゆへ  
 は又我良人と宣つては則ち汝が慕ふ殿を誰とありつれど  
 関東の武名を裏しす右大お小栗判官代助と知るやあはれや  
 浅女よ斯る大つとやうとれかどても生かされど懐涙をみよ  
 胸の辺におめつれぬ照天姫の慌忙そのまきさつりや  
 かなれ生かすなら我良人の心の上を漏さんと思ひよどいで爾とせらめ  
 ころ道理よとれども一回殿は添卧せし女めあれば今此にて殺さば奴家う妬  
 めておとふ命殺さぬと人の誹謗の厭もど殿のおほきん行も悪くま  
 せう人奴家う彼が家を買つたれおれも主と執する恩義もあま  
 止む今更めて道理をよく云ふさる軸もて代は漏さともめつたれ助  
 へくをばきねと云へど小を即返と振鳴呼愚ののを宣ふま夫大功の細僅と

顧とていやまも昔佐々木高綱の夜と先陣せん合戦の夜ゆ  
 一人高戸お思ひ行海士と欺れし隙を又異人お教へんとを残も海士  
 を切害とてその翌日浅瀬を渡つて先陣に敵百歳の今までも  
 めつたやと退り姫君と少も肯まもは姫の仇とも苗めつて  
 声を荒らげて汝がいも爾らるるがら女入と助くともさあでの害のあはれ  
 まれと女のまれ命ゆゑ斯の辞じとまげえつりはく奴家と憐れか免角分  
 小栗判官と怨むる言信よ小を即も後の害を想へとも主命乖かして  
 遂に先見と免つる先見早くも身を犯し照天小對ひ涙と拂ひはれしく  
 まくと云侘つらる偽めて実の奴家とまきさつり殿と二人心まき事する下公  
 と猪子しお差すまは殿も公のうろたひ易く他つるを愛まひ此方のめつた風  
 のあはれお色失て疏るる情は愛仇の人あもせよ命の跡と及ぶをそ

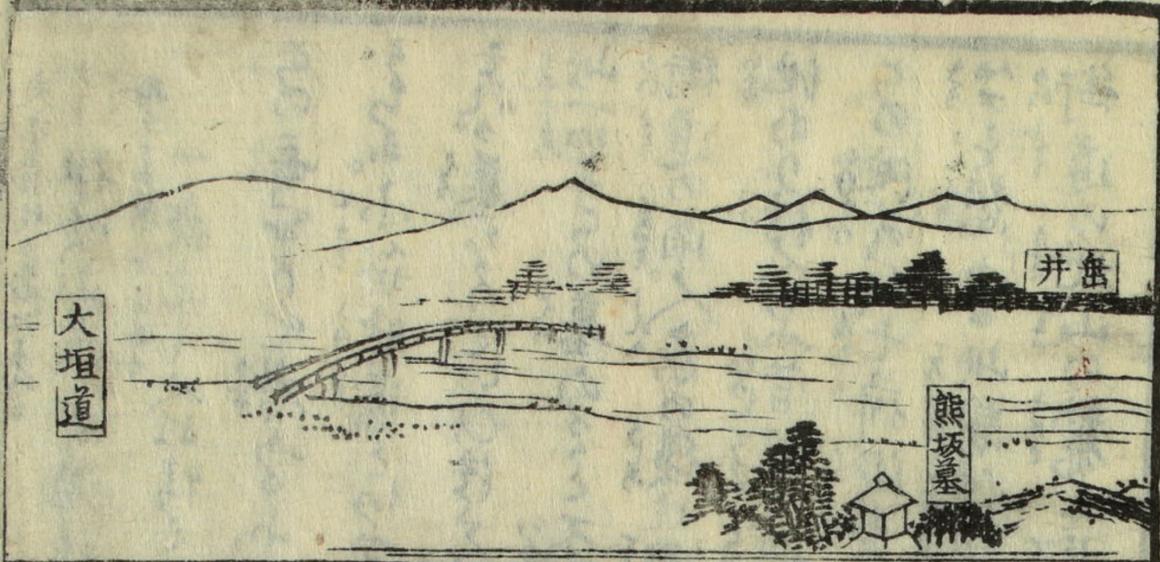


書肆衆星閣の主人曾く山水大好癖あり。生堂の暇四方を遊歴  
 あり。名勝の地を巡り毎々其地方の風色名産古器を摸写して以て  
 土儀とて其年の中。予今年寒燈夜話を編述し。後帙第三巻に  
 三洲二村山濃州青墓の里同赤坂宝光院の事。僅か出せり。既に  
 稿を脱し。衆星閣は終る衆星閣これを閲し。予曰僕遠方乃  
 事未知らむと以て。今此書に載せし三沢濃州を既出せり。粗  
 その風土を知り。先生の述より其方位大に差あり。予以て  
 想ふ。先生の必き人せぬ又多うはなれ。幸彼地方の地図名産亦を  
 考へ。今此書の因りて出せり。知らざれば人亦多うはなれ。益は  
 とも又害おろく願ふ。是が考へて。此巻の後に出せられとせぬ。  
 此書の大旨も関らばはことある。衆星閣の老波心を空しくせん。

不ある。之書肆の字と処の図は。濃州青墓里同赤坂宝光院  
 の地図と同寺の古尾を指す。と。二村山の紅葉と秋と。其  
 地を巡る。其昔の事。その地の光景推量せられて憐れ。蛇足の  
 を忘る。元星閣の云也。予が愚按をのりて。此亦も出せぬ。  
 二村山。柞より。と。そのの図説を予が意見の僻説。余の  
 多く。衆星閣の述べ。蛇足を少く補ひのみ。

青墓里と

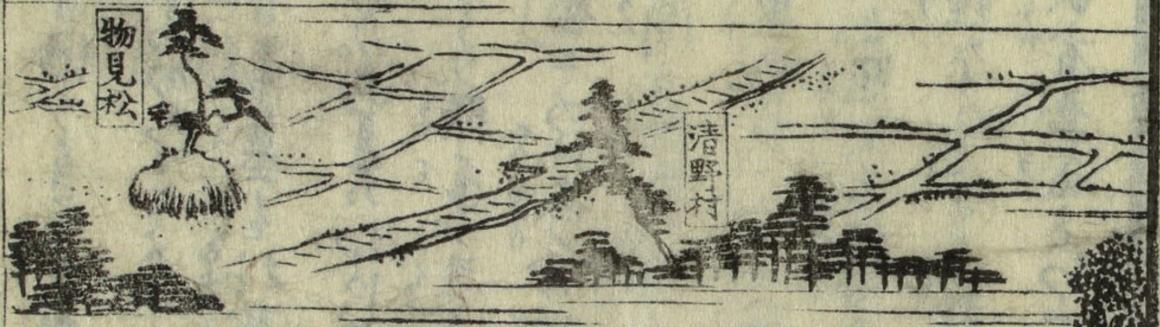
美濃國 昔の野と。此國は青野。文野。各野。とて。大まかなる。その郊あり。此  
 垂井の驛と赤坂の驛の間に。むじろ驛の驛なり。今。小栗  
 かりぬ。青野。が。此地方なり。



大垣道

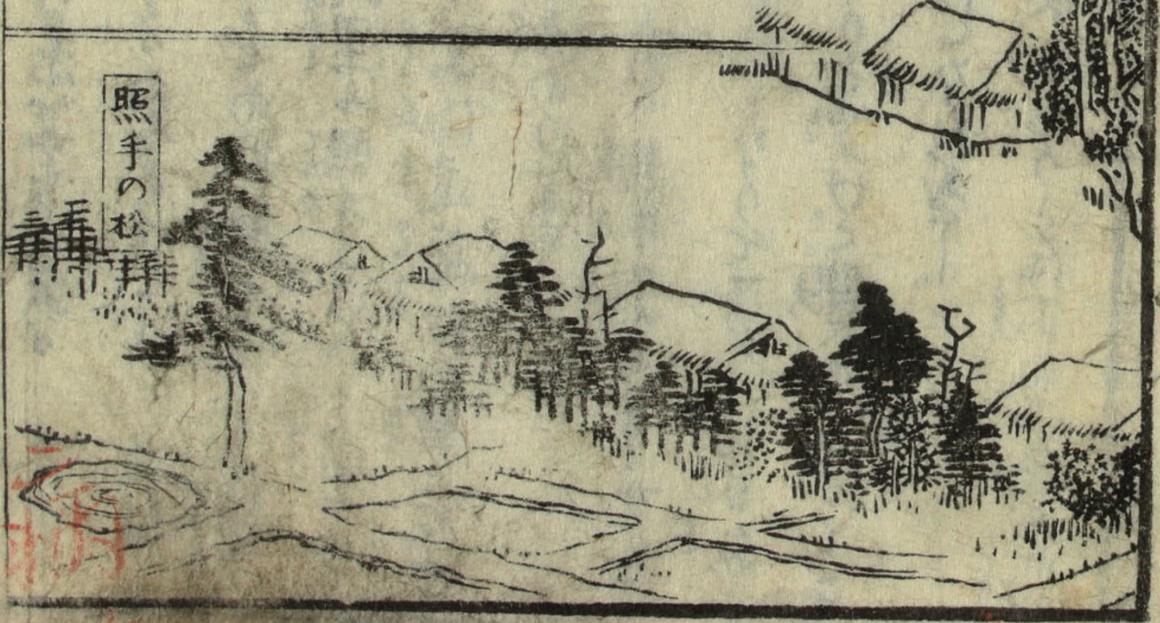
井岳

熊坂墓



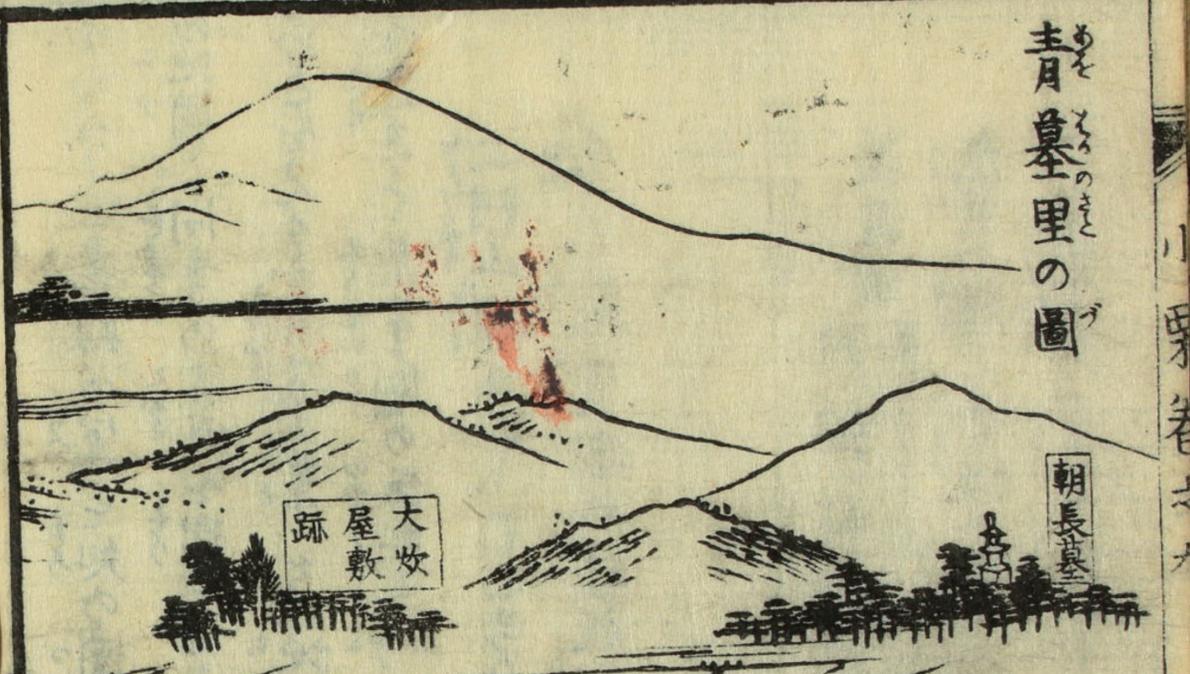
物見松

清野村



照手の松

青墓里の圖

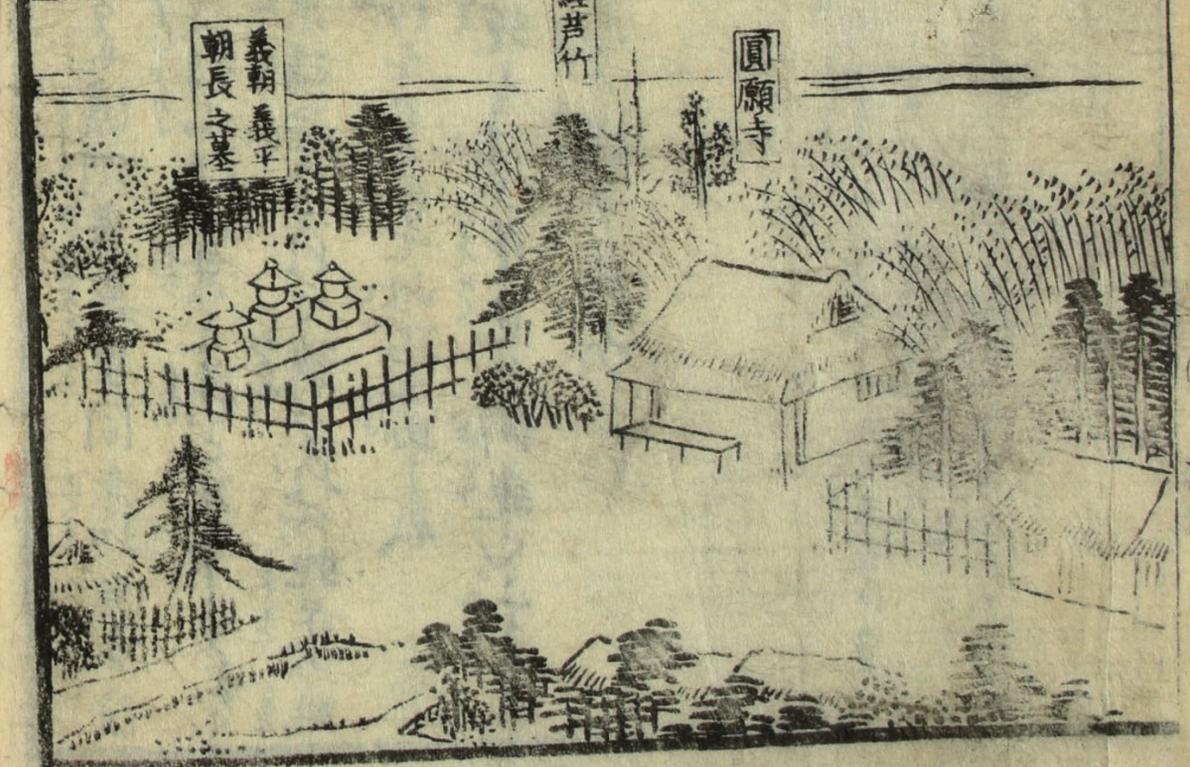


大炊屋敷跡

朝長墓



青野原



義經芦竹

圓願寺

義朝義平朝長之墓

新編

生亦通

夫亦青れりよある

伊吹山さし帝はるは

為

拾玉まをよある

一夜え一人は情もあか

この野をりて老るる昔ま

らら小世作塚とらあ

それが墓なりといひは

此所もこの墓あると不審

街道の南人家の後北田

池あり傳く昔照天此里

この池あり七荷汲めりと

笑と想ゆ此説津福理

街道の北山の麓に長者

の長者大炊が任り跡なり。昔平治の亂源の  
義朝戦負く僅八騎かて此地方に落りぬ。此の地の長者大炊と  
斯く居くんと然てくは義朝と尾張の行き。我平の御弾と赴た  
朝長を信じて下り東山南海の源氏と語ひ不日軍兵に成り  
余の誓の恥を雪ぐんと既ちうちたんと。然る小朝長矢傷き  
起こと社に我朝これをもく甲斐なりと贈り蜜刺し殺し  
こそ則ちその屍を葬りし所なり。と里人の語り也。  
街道の端に圓願寺といふ庵室の如き寺あり。其境内に我朝義平  
朝長二人の墓あり。石の五輪あり。  
同寺に後日我朝の芦竹とて竹林あり。

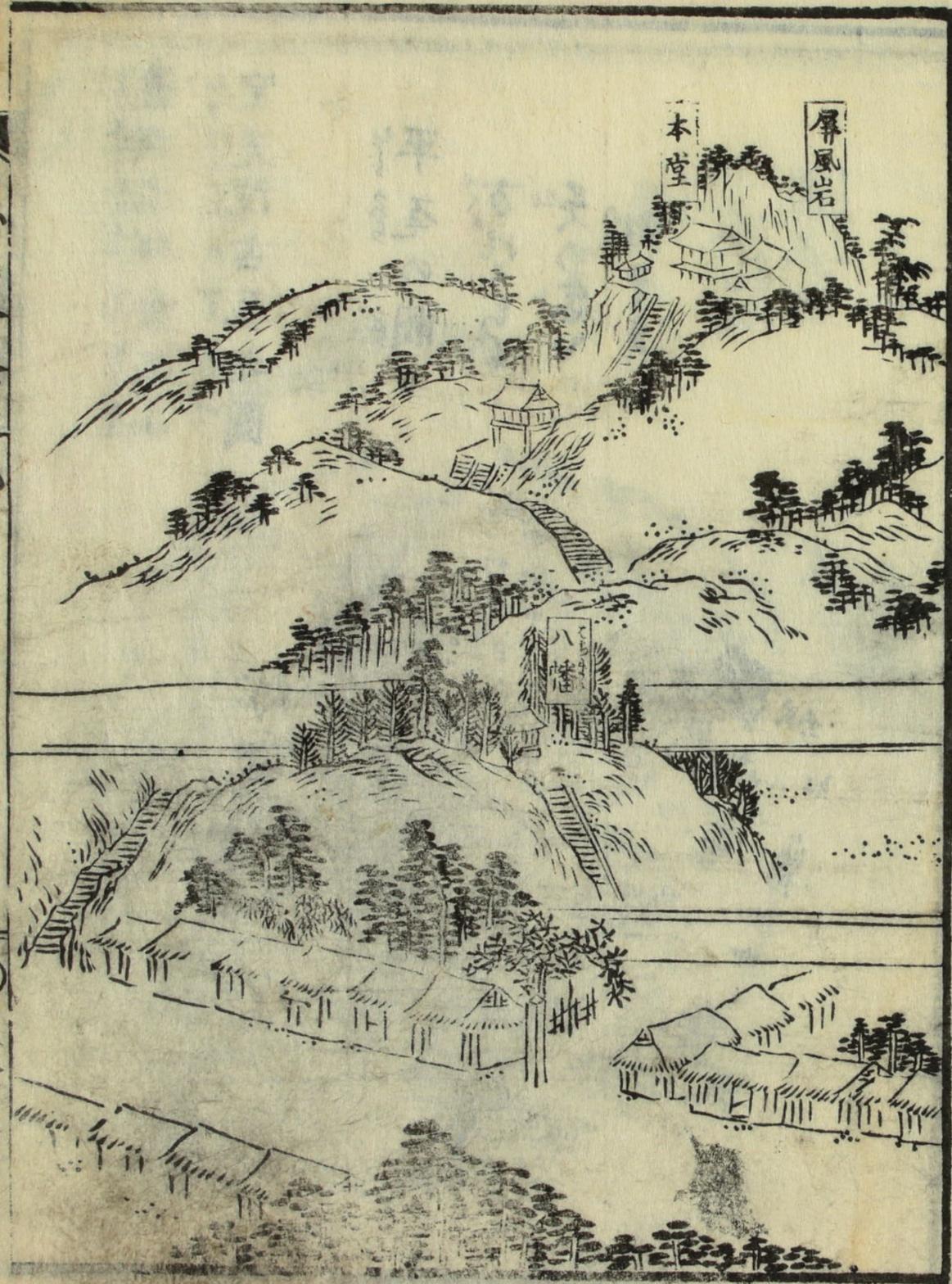
街道の北相川の方小寄りたる所、松坂塚として小堂あり。松坂塚  
 ことと昔々やまの松竊盗あり。世のよく知る所なれば、松坂塚に松を  
 おぼがれ南の方昔野が原の左半町をうり。昔野の一本松といふ有本松  
 幣懸松又の名は物見松といふ傳り。昔朱雀帝の御時。東夷  
 平将門王命を叛き。下総國相馬郡に居た下で。乱を發せしむ。是夜  
 退治し、もつる為、南國中山金山を大神子移し、て幣懸松此松よを  
 より。幣懸松と賞し、後遠の星霜を行へ。仁安加意のころ、松坂  
 深林の栲梁松坂長靴といふ所の此や、もつる松穴に下。徒堂松穴集へて  
 旅客を劫りし。其賊物と奪ふ。常此松より、て旅客のすまを奪ひ、て  
 こと。それよりして物見松の名の負り、古幣懸松の是を賣り、て  
 今物見松の巧名あり。此木の不幸といふ。古代の松を正徳年間

木風のうめ吹倒さるゝ枯るれ。その後植栽せられ、大木となり  
 枝葉栄えり。

右中世と處の青墓の園説と。衆星閣生業のため、前年此  
 地方をうりし折、天性の癖ありし。是の書を記し、て  
 粗語社撰、うり年がま、もあつた。其の賈人の俄比の執事  
 其の場り、を記し、て

金生山寶光院

濃州赤坂の驛、北山上あり。真言信我寺、領十石。本尊虚空藏  
 菩薩大巖の中、安置を弘法大師の作用基も同。毎年三月十三日  
 法會あり。



赤坂  
宝光院  
虚空藏  
山上の  
圖

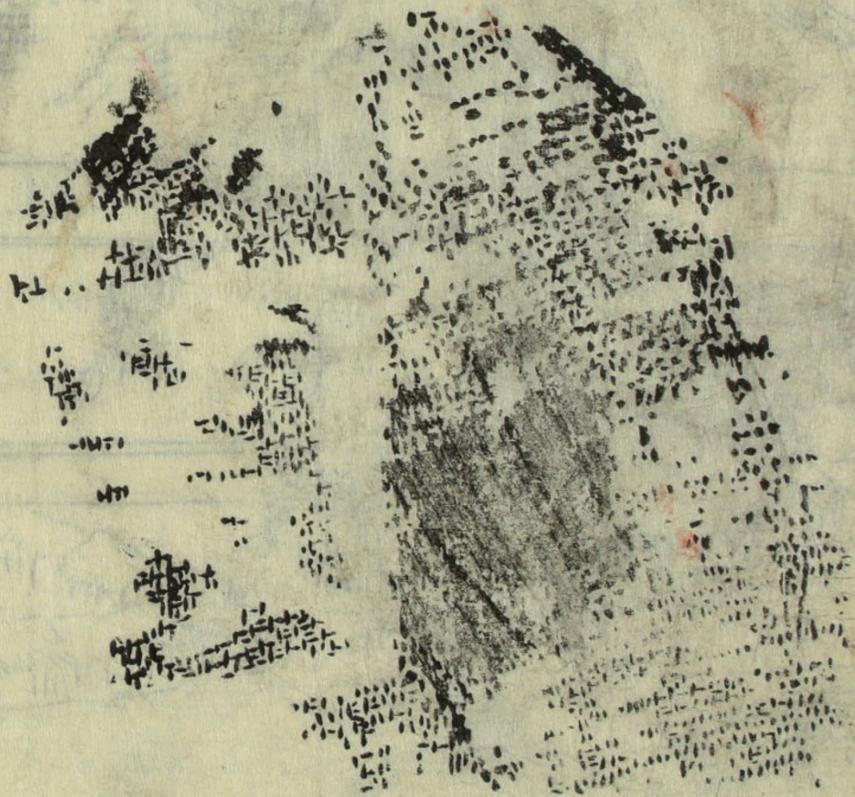
通 本 本

小栗卷之六

濃州赤坂金生山  
室光院古尾之圖

平尾の圖

方れるちゆ  
兵の字と  
彫きり



通 本 本

圓尾の

小口と

摺とれ

かり

圓尾  
摺たる也



同前

平尾の

小口

摺

金箔

金箔

お

今僅

所

金色

お

石丸



鎮守御嶽権現祭礼毎年三月十一日なり。

山上本堂の後屏風岩といふ峻奇の大巖あり。坐傍より鈴石と云物あり。本堂の前ふ百足石といふ奇石あり。

山の中腹は八幡の社あり。其麓を北へ行けば谷汲の訖音へ出づ。

山北西をひらきといふ昔孫六入道兼元といふ名鑑治の居りし所なり。

山上より東と改まれば釜釜里など眼下せり。風を殊勝なり。

麓の町れ端といふ杭瀬川流る。其末と呂久川といふ土民をせし川と云ふ。

此川れ下がさうさうといふ。

先行紀

あせ川といふ所より夜あけれり。川端より出づ。

梅の宮中へ時天きまら川流る。其月なみも。

二里のあり故人の公さひ。

廿日 武蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

い ち 日 武 蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

い ち 日 武 蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

い ち 日 武 蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

い ち 日 武 蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

い ち 日 武 蔵 公 権 御 嶽 祭 礼

